

浄土

monthly JODO

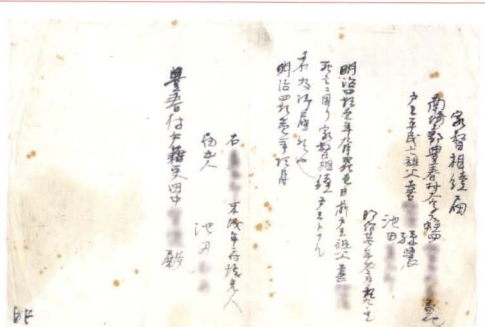
78

2016
July
August

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



左右315ミリ、天地230ミリ。手触りのよい和紙である。

骨董市巡りをしていると面白いものに出会う。露店に小さな仏像が並べられていた。三センチほどの薄っぺらな仏像で、手に取ると驚くほど軽い。物珍しさから三体購入したのだが、あとで調べてみると、東南アジアでお守りとして椰子の実で作られた仏像らしい。現在でも作られ、売られているものである。面白いものというのは、この仏像を業者が包んでくれた半紙である。広げてみると達筆で「家督相續届」と書かれている。写真がそれである。私には判読できない文字もあるが、内容は次のようなものだ（■部分は判読不明、左隅にも何か書いてあるが不明）。

家督相續届

南埼玉郡豊春村大字下蛭田●

●●●番地

戸主平民亡祖父 喜●●孫■

池田●●●

明治廿四年参月■九生

明治四拾壹年九月■壹日 前

戸主祖父 喜●● 死亡に因

り家督相續戸主トナル

■●●●●届■也

明治四拾壹年拾月

右●●●未成年ニ付後見人

届出人 池田●●●

豊春村戸籍吏田中●●●殿

明治四一年と書かれているから、一〇八年ほど前のものである（とは言え、古くても個人情報に関する書類であるから、名前と住所の詳細は●で伏せ、写真もはかしている）。前戸主であつた喜●●●が亡くなったので、家督を孫の池田●●●が相続する。池田●●●は未成年につき、池田●●●（かな文字の女性名）が後見人として家督相續届を提出するというものである。池田●●●は母親だろうか。池田家が何を生業としていたか、この届出ではわからない。

豊春村は埼玉県中東部の南埼玉郡に属していた村である。一九五四（昭和二九）年に春日部町、武里村などとともに新設合併され、現在の春日部市となる。遡って一八八九（明治三二）年の町村制施行で道順川戸村、上蛭田村、下蛭田村、花積村、道口蛭田村、南中曽根村、新方袋村、増戸村、増富村、上大増新田、下大増新田、谷原新田が合併し南埼玉郡豊春村が成立している。届出に書かれている下蛭田村の名が見える。おそらく農村地帯だったのだろう。

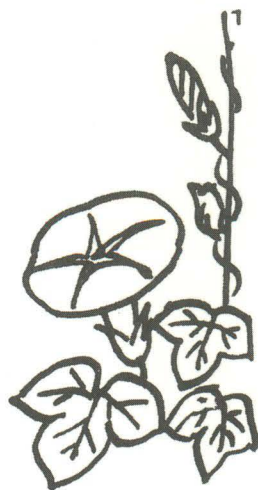
豊春村の戸籍吏に提出されたこの届出が、どういう経緯で骨董業者の手に渡り、価値のないものとして、包み紙に再利用されることになったのか。

一〇〇年以上前の、縁も所縁もない豊春村の池田家の家督相續届が、私の手許にあるというの不思議な話であるが、こういう出会いも骨董市巡りの面白さである。

浄土

2016/7・8月号 目次

連載 法然上人のお言葉②④	梶村 昇 英訳 河西良治	2
法然上人と親鸞聖人(二)	林田康順	4
連載小説 渡辺海旭⑦⑩	前田和男	12
連載 響流十方	林田康順	18
連載 江戸の川を歩く⑤	森 清鑑	22
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子	28
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
 表紙写真＝鬼海弘雄
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

法然上人のお言葉

ご法語

流刑さらにうらみとすべからず。(中略)念仏の興行、洛陽にしてとしひさし、辺鄙におもむきて、田夫野人をすすめん事、季来の本意なり。

(御流罪の時門弟に示されける御詞)

現代語訳―配流になることを少しでも恨みと思つてはいけない。(中略)念仏を勧めること、都では永くなつた。田舎に行つて、その人々に勧めることは、私の年来の願いである。

Honen Shonin's Sayings

We should never have any grudge against anybody about our exile. (...) We have been recommending the nembutsu to people in the capital city of Kyoto for a long time. My long-cherished desire is to go to the provinces and recommend it to the people there. (The words Honen said to his disciples at the time of his exile)

Commentary

When we recite the nembutsu for a long time, we find ourselves getting into a certain rhythm. When the ex-emperor Gotoba (1180-1239) made an imperial visit to Kumano, two court ladies became Buddhist priestesses because they gratefully accepted the nembutsu accompanied by such a rhythm. This happening triggered off

解説

念仏を永く称えておりますと、一つのリズムのようなものが生まれてきます。それが有り難く感じられて、後鳥羽院（1180-1239）が熊野に行幸中に、女官が二人出家するという事件がありました。それが引き金になって建永の法難（1207）が起り、法然の弟子二人が死罪になり、法然は四国に流罪になりました。この法語はその時のものです。

それにしてもこれほどの大事が、当時の一般の文書に何の記録もありません。一番古い記録が『歎異抄』の付記で、それでも事件後81年、法然没後77年で、しかも一般の記録とは言えません。僧侶の死罪や遠流は、記録するだけでも祟りがあると怖がられていたのでしょうか。なお遠流（*えんりゅう*）というのは、当時の法律用語で、京都からの距離によって、遠流・中流・近流（*こんりゅう*）に分けられております。延喜式では、伊豆・安房・常陸・佐渡・隠岐・土佐などが遠流で、越前・安芸が近流、その中間が中流です。法然は土佐（実際には讃岐に変更）流罪ですから遠流です。

an event called "Persecution in Ken-ei" (1207AD), and, as a result, Honen was exiled to Shikoku and his two disciples were sentenced to death. On that occasion Honen said the words quoted above.

But even so there existed no general documents about this major event in those days. Its oldest record was found in a supplementary note in Tannisho, 81 long years after the incident, and 77 years after Honen's death. But the record was not a general one. I wonder if archivists of those times shrank from recording incidents such as execution and "onru" (i.e., exile to a distant land) of priests because their recording would just lay curses on them. I incidentally remark here that, in legal terms of those days, "onru" was one of the three types of exile ("onru", "churu" and "konru") according to the distance from Kyoto; in Englishiki, a collection of detailed enforcement regulations at that time, firstly, the exile to distant provinces such as Izu, Awa, Hitachi, Sado, Oki, Tosa was called "onru", secondly, the exile to near ones such as Echizen and Aki was "kinru", and, thirdly, the exile to the midway between "onru" and "kinru" was "churu". Honen's exile was "onru" because it was to Tosa.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

法然上人と
親鸞聖人

連載(二)

—教科書記述の実際—

大正大学教授

林田康順

教員室での 思い出

大正大学大学院に進学し、浄土学を専攻していた私は、大学院在学中の平成五年から十二年間、母校芝学園において中学社会科と高校公民科の講師を勤める機会を与えられました。学部時代は法学、大学院では仏教学を学んだことから、中学校の公民、高校の現代社会・政治経済・倫理を主に担当しました。教えることの難しさを痛感する日々でしたが、とても充実していました。

当時、芝学園の職員室は多くの教科書が山積みされていました。先生方に聞いてみると、販売促進のため、各教科書会社の方が見本版教科書を持参してくるそうで、どの学校も状況は似たり寄ったりだと教えられました。授業の合間にそれらの教科書のページをめくり、法然上人についての記述を読むたびに、過去の複雑な思いは一層強くなっていきました。

すべての 教科書に

芝学園講師を経て、大正大学の専任講師に任ぜられてから数年間、中学・高校で教えていたこともあり、教員免許の取得を目指す学生を対象とした社会科・公民科教育法という講義を担当しました。講義の性格上、発行されている中学社会科の公民の教科書と高校公民科の現代社会・政治経済・倫理の教科書をすべて購入しました。すると、表現の差こそあれ、「法然上人の教えをさらに徹底したのが親鸞聖人である」といった説示が、高校倫理のすべての教科書に見られたのです。私にとつて、「すべての教科書」という状況は、大きな衝撃でした。なぜなら、そもそも教科書の説示は、たとえそれが一方的な記述であったとしても、文部科学省による検定を受けている以上、大多数の生徒にとつては、半ば公的なもの、お墨付きを受けたものとして受けとめられてしまうからであり、それが「すべての教科書」に記述されていれば、それと異なった見方は間違っていると見なされてしまいかねないからです。

「高校倫理」教科書 記述の実際

ちなみに平成二十年四月の時点で、八社一〇冊の高校倫理の教科書が刊行されていた。これら一〇冊の教科書において、法然上人と親鸞聖人をめぐる説示は次のようなものでした。まずは、五冊の教科書の説示です。

- ①東京書籍『倫理』「こうした法然の教えをさらに徹底したのが浄土真宗を開いた弟子の親鸞である。」（八四頁、平成二〇年二月一〇日発行）
 - ②清水書院『新倫理』「法然が開いた浄土宗の教えをさらに徹底したのが、浄土真宗の開祖、親鸞である。（中略）法然の説いた他力をさらに徹底した親鸞の立場は、絶対他力とよばれる。」（八二頁～八四頁、平成一九年二月一五日発行）
 - ③実教出版『高校倫理』「親鸞は、法然の専修念仏の教えをさらに徹底させ、浄土真宗の祖となった。」（八〇頁、平成二〇年一月二五日発行）
 - ④山川出版社『現代の倫理 改訂版』「法然の教えをさらに徹底して、浄土真宗の開祖となったのが、弟子の親鸞である。」（七六頁、平成一九年三月五日発行）
 - ⑤実教出版『倫理』「親鸞は、法然の専修念仏の教えをさらに徹底させ、浄土真宗をひらいた。」（五七頁、平成一六年一月二五日発行）
- 一読してすぐにお分かりになるように、これら一連の教科書には、「法然の教え」「法然

が開いた浄土宗の教え」「法然の説いた他力」「法然の専修念仏の教え」を「さらに徹底した」のが「親鸞」の立場であり、浄土真宗の教義に他ならないという、判を押したような共通した記述を見出せます。しかし、こうした一連の記述を裏返せば、「法然上人の教えは、親鸞聖人の教えと比較して、不徹底な教えに過ぎない」と受けとられかねません。

次に二冊の教科書の説示です。

⑥数研出版『改訂版 高等学校倫理』「法然の教説をうけついで親鸞は、専修念仏をより深く、内面からとらえたことによつて後世の人びとから浄土真宗の開祖とあおがれた。」（七〇頁、平成一九年一月一〇日発行）

⑦第一学習社『高等学校 改訂版倫理』「浄土真宗の開祖とされる親鸞は、師の法然から念仏往生の教えを聞くことによつて迷いを脱し、その教えを継承し発展させた。」（八〇頁、平成一九年二月一〇日発行）

これらの教科書には、①から⑤に記載される「法然上人の教えをさらに徹底したのが親鸞聖人である」といった記述こそないものの、やはり「法然の教説」や法然上人の「専修念仏」や「念仏往生の教え」を「より深く、内面からとらえ」、あるいは、「発展させた」のが「親鸞」の立場であり、浄土真宗の教義に他ならない、と指摘します。すなわち、こうした教科書の記述を裏返せば、「法然上人の教えは、親鸞聖人の教えと比較して、まだ浅く、外面に留まっている、未発展な教えに過ぎない」と受けとられかねません。

次の教科書の説示です。

⑧教育出版『新倫理 自己を見つめて』「法然の弟子親鸞は師法然の教えを徹底し、自力の修行を捨て自らの身をいっさい仏にゆだねるという絶対他力の立場を選び

とった。」（九六頁、平成一九年一月二〇日発行）

前述した①から⑤の教科書と同様に、この教科書においても、「親鸞」が「師法然の教えを徹底し」たと記述され、続けて「自力の修行を捨て」た「絶対他力の立場」であると記されています。こうした記述からは、「法然上人の教えは、親鸞聖人の教えと比較して、自らの力で悟りを開くことを目指す自力の要素が残存した教えである」と受けとられかねません。

次の教科書の説示です。

⑨ 清水書院『現代倫理 改訂版』「法然の念仏の教えをさらに徹底させ、浄土真宗を開いたのが、親鸞である。（中略）その絶望ともいえる自覚の中で、いつさいの自己のはからいを捨てたとき、阿弥陀仏はそういう凡夫にこそ慈悲をそそぎ、浄土へと往生させるという、師法然の教えの真意を悟ったのである。（中略）法然に芽生え、親鸞が確信したこの教説を悪人正機という。（中略）法然の教えをさらに徹底させた彼の立場は、一般に絶対他力の信仰といわれる。」（七六頁～七七頁、平成二〇年二月一五日発行）

この教科書では、「法然の念仏の教えをさらに徹底させ」たのが「親鸞」の教えであることを二度も説示しているに留まらず、親鸞聖人が「師法然の教えの真意を悟」り、「法然に芽生え、親鸞が確信した」教説こそ「悪人正機」の思想であり、その立場こそ「絶対他力の信仰」であると記されています。いささか遠回しな表現になつてはいるものの、教科書の説示を一読して受けとめられる理解とは、「法然上人の教えは不徹底なものに留まつており、法然上人の中に芽生えてはいながらも、法然上人が開花させることができなかった

た真意を親鸞聖人だけが確信し、開花させることができたのであって、親鸞聖人を宗祖とする浄土真宗にこそ、その教えは継承されている」と受けとられかねません。

最後の教科書の説示です。

⑩ 一橋出版『倫理 現在を未来につなげる』「法然の専修念仏の教えから出発して、しだいにそれをのりこえ、純粹な信仰の立場を確立したのは、浄土真宗の開祖とされる親鸞である。親鸞は、師法然の教えになお残っていた自力的な要素」を否定し、ひたすら阿弥陀仏の衆生救済の誓い（本願）を信じ、それにすべてをまかせる絶対他力の信仰を説いた。すべては仏の誓いのおのずからなる働きであり（自然法爾）、仏の救いを信じて念仏をとるその瞬間の「信」によって往生が決定する^⑪、と親鸞はいう。」（四〇頁、平成一七年一月二〇日発行）

この教科書では、より直接的な表現によって、「法然の専修念仏の教え」を「のりこえ、純粹な信仰の立場を確立し」、「法然の教えになお残っていた自力的な要素を否定し」たのが「親鸞」の教えであると記されています。こうした説示からは、「法然上人の専修念仏の教えは、乗り越えられるべき、不純な信仰を内に含み、自力的な要素の残存した教えである」と受けとられかねません。ちなみにこの教科書には、「法然の教えになお残っていた自力的な要素」と「仏の救いを信じて念仏をとるその瞬間の「信」によって往生が決定する」という二箇所について、それぞれ次のような註が付されています。

(i) 「法然は、口称念仏を往生へみちびく道（手段）として、一日六万遍という容易ならぬ量の念仏を求めた。」（四〇頁）

(ii) 「救済を約束する阿弥陀仏にすべてをまかせる気持ちをこめたただ一回の念仏に

よって救われるというのが、親鸞がついに到達した確信であった。信心を得たあとにとなえる念仏は、「報恩感謝の念仏」として説かれる。」（四〇頁）

こうした記述のままでは、あたかも法然上人は、すべての願往生人に対して日課六万遍のお念仏を要請し、そうしなければ浄土往生は叶わないと主張されたかのように受けとられかねません。そればかりか、註（ii）の前半に言及されている「救済を約束する阿弥陀仏にすべてをまかせる気持ちをこめたただ一回の念仏によつて救われる」と一貫して説き続けたのが、他ならぬ法然上人であることは一連のご法語によつても明らかです。もちろん法然上人は、わずか一遍のお念仏によつて救われると受けとめつつも、お念仏の教えに帰依したその瞬間から命尽きるその時まで生涯にわたつてお念仏を相續して、阿弥陀仏との縁を決して絶やさないようにすべきであるとお示しです。

いかがでしょうか。教科書記述の実際をありのままにお伝えしました。一方的、かつ、偏った記述が、これまで放置され続けていた事実がお分かりいただけたと思います。（続く）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第七十回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

仏教壁画切り取り男との出会い②



探検家、ル・コックに接触せよ

渡辺海旭を「弟子」ではなく「共同研究者」として受け入れたことで、ロイマンの研究心に一気に火がついた。それが向かった先は、折しも中央アジアで発見・発掘がつづいていた原始仏教関連の歴史的な文獻——わけても、喉から手がでるほど欲しかったのは、ドイツの探検隊が三度にわたる調査でトルファンから持ち返った貴重な文化遺産だったが、その大半は、ベルリンの民俗博物館とベルリン大学のもとにあった。その「学問的元締め」であったピッシェル教授が急逝したことでチャンスが巡ってきたかに見えたが、残された弟子たちのガードが固く、事はそう甘くはなかった。

「さて、どうしたものか」と思案投げ首する教授に、海旭が出した知恵は、ベルリン民俗博物館の研究員アルベルト・フォン・ル・コックと接触することだった。

ロイマン教授は、膝を叩くと珍しく弾んだ声で言った。「なるほど、それはたしかにいい手かもしれぬ」

前述したように、ドイツの中央アジア探検は、ともに一級のオリエント研究者でもあるグリウンヴェーデルとル・コックが隊長・副隊長を交互につとめたが、二人は性格・資質が正反対なため、「犬猿の仲」で、その噂は遠くストラスブルクにまで届いていた。

温厚篤実なグリウンヴェーデルはアカデミアでの評価も高く、ベルリン民俗博物館の館長を拝命、それに対して直情径行のル・コックは単なる無給の研究員の処遇に甘んじていた。また、グリウンヴェーデルはベルリン大学のピッシェル教授とも昵懇で、教授のもとへ貴重な史料を提供したのも彼だった。ル・コックはそんなグリウンヴェーデルのふるまいを面白くおもっているはずがなかった。

したがって、まずはル・コックに接触して、首尾よく彼と折り合いをつけられれば、反グ

リユンヴェーデルの立場から、ベルリン大学に提供した東アジアからの「到来品」をわけてもらえるかもしれない。そうロイマンと海旭は考えたのである。いわば、「東アジアの古写経を射んと欲せば、まず不遇をかこつ発見者の片割れを射よ」作戦であった。

本来なら、ロイマン教授が出向くところだが、その役は海旭に託された。

「アカデミアの常識人」であるロイマンには、紳士と評判の高いグリユンヴェーデルとは真逆の毀誉褒貶はげしい人物と会って交誼を結ぶ自信はなかったからだ。かつてストラスブルクへやってきた仏教学界の変わり種、マックス・ヴァレザールと旬日をおかずに意気投合した海旭なら、その任にじゅうぶん耐えられるとロイマンは踏み、海旭も師の意向を受け入れたのだった。

かくして、海旭は、ストラスブルク大学のロイマン教授の名代としてベルリンへと向かったが、胸中に期待感とともにうかんでく

る不安を抑えることができなかった。

ル・コックなる人物は、仏教壁画切り取り男の異名をとるだけあって、仏教と仏教が生み出した文化遺産も彼にはたんなる「ハンターの獲物」であって、畏敬の念などまったくないのかもしれない。だとしたら、破談に終わるだろう。

と、奇妙な「たとえ」が海旭の頭に去来した。

——さしずめル・コックは石山本願寺を焼き討ちした織田信長で、自分はそれを迎え撃つ顕如か……。いやいや、迎え撃つのではなくこちらから敵の本拠地に入り込んで、真意をたしかめ場合によっては説法によって翻意を促すのだ。そう自らに言い聞かせて、海旭はベルリンへ向かう車中でおもわず苦笑した。

信長と顕如、ベルリンで対面す!?

それでも、当人を前にすると、海旭は緊張を抑えきることができなかった。ル・コック

は想像のとおり、いや想像以上に信長的であり、海旭はますます顕如の気分になされた。民俗博物館で初対面のあいさつをかわすなり、いきなりル・コックはこう言ったのだ。

「貴兄の目論見は、わかつている。館長のグリュンヴェーデルと折り合いが悪い私をつかって、わがドイツのトルファン探検の成果をストラスブルクにもおすそ分けしてもらおうというのだろう」

凶星を刺されてたじろぐ海旭を、愉快げに見下ろすと、ベルリンの信長は続けた。「おおいにけっこう。その目論見に乘ろうじゃないか。あんなお絵かき学者には、仏教遺跡の価値などわからんだろうから」

「お絵かき学者」とは、絵の嗜みのあるグリュンヴェーデルを揶揄したものだ。ミュンヘン美術学校に学んだ彼の画才も、ベルリンの信長からすると「文弱」の証しでしかないらしい。海旭はあつげにとられるばかりだった。噂には聞いていたが、二人の仲の悪さがこれ

ほどとは――。

グリュンヴェーデルはミュンヘン大学で東洋学を学ぶと、ベルリン民俗学博物館の研究員として仏教図像学を研究。やがて同館のインド学部門部長をへて数年前から館長を務めていた。かたやル・コックは裕福なワイン商人の出で、イギリスとアメリカに遊学して医学を学んだのち帰国して家業を手伝っていたが、四十歳のときにオリエント学にめざめたという「変わり種」だった。そんな「正系」と「異端」の距離感が二人の間をいつそう剣呑なものにしているのは間違いない。

ル・コックはライバルへの悪罵をひとしきり連射したところで、止めをさした。「やつのご高説ときたら、当たらずとも遠からずという程度のものにすぎん。もつとも雄弁なのは、なんといつても現物、現物しかない」

やおらル・コックは席を立つと、海旭を促した。「論より証拠。まずは、わが成果物を見てもらおうか。そう、シルクロードの外れ

のベゼクリクやキジルの山腹で千年の眠りに
ついてた仏教壁画だ。私が三度の探検で苦
労して持ち帰ったものだ。実は貴兄のお目当
ても、それではないのか」

これまた図星だった。それらが安置されて
いる一画に案内されて海旭は圧倒された。イン
ドで生まれた仏教がやがて日本へとやって
くる、その歴史の途次がここにある。悠久の
時の痕跡を見上げて海旭は瞑目して合掌し
た。やがて目をあけて、細部に精査の目をは
わせているうちに、無残な仕打ちに気づいて
息を呑んだ。

ある壁画の中に描かれた菩薩の顔の中央に
深い傷がある。それは顔だけではない、上は
頭髮におよび、下は喉から胸にまで続いてい
る。海旭は一歩前へ近づいて目をこらした。
それは自然の風化によってできた瑕疵ではな
い。明らかに機械で切り取り、ベルリンに持
ち帰ってからここ民俗博物館で接合した「傷
の縫合跡」だった。

と、胸中からある言葉が沸き起こってきた。
それが明確な文字となつて脳裏に定着する前
に、ル・コックは言った。

「ワタナベ、といったか。おそらく仏教徒の
きみの頭のなかには、次の言葉が浮かんだの
ではないかな」一拍入れ、にやりと笑みを漏
らすと続けた。「この壁画泥棒め、と」

またまた図星だった。海旭はたじろいで、
返す言葉を失った。ル・コックは、「こいつ
を前に」と傷だらけの菩薩を指さして続けた。
「やつといいあつたものさ。やつときたら、
模写をするといつてきかない。やつとはそ
のとき探検隊の隊長をつとめたグリウン
ヴェーデルだ。「たしかに隊長殿は美術学校
に学んだだけあつて絵は本職はだした。でも、
私は、こう言つてやつた。いくら優れた模写
の技術をもつてしても、現物にはかなわない。
機械で剥ぎとつたほうがつとり早くて確実
だと。結局やつは私に反論できず、かくして
れっきとした現物がここに鎮座ましましてい

るといわけさ」

海旭は、この無謀極まりない論法に違和を覚え、反論をしようと頭のなかで論旨を組み立てはじめたところへ、またしてもル・コックに先回りされた。

「単なる実利・功利だけでいっているのではない。実は、一見乱暴に見えるが、むしろこうしたほうがこのすばらしい美術的、宗教史的な宝を消失から救い出せるのだ。そのまま放置しておけば、いずれは偶像否定のイスラム教徒に破壊されるにきまっているからだ」

たしかにこのル・コックの理屈は、一世紀ほど後、アフガニスタンに蟠踞するイスラム過激派タリバンによるバーミアン遺跡の爆破で証明されることになるが、この時点で知る由もない海旭には、百いや千歩譲っても、乱暴すぎて納得はできなかった。

互いに発掘を競いあったイギリスの探検家スタインも、ベゼクリクではル・コックにならって壁画はがしをしているが、そのスタイ

ンですら、ドイツ隊は原状写真もとらずに、いきなり壁を切り取るなど、言語道断であると批難している。どうみてもル・コックは学者の作法を逸脱していた。

海旭は胸中でつぶやいた。「やはり、この男は織田信長だ」

そして、こう思った。この男と組むのはおそらく無理だろう、と。

(つづく)

孝養の心をもて父母ちらはを重くし思わん人は、まず阿弥陀ほとけにあづけまいらすべし、わが身の人となりて往生を願ひ念仏する事は、ひとえにわが父母の養いたてたればこそあれ、わが念仏し候功をあわれみて、わが父母を極樂へ迎えさせおわしまして、罪をも滅しましませと思わば、かならずかならず迎えとらせおわしまさんずるなり。

(法然上人『示或人詞』)

父母に孝養を尽くし大切にしようと思う人は、まず父母のことは阿弥陀さまにお任せして、このように考えてみてはいかがでしょうか。すなわち「私が人として生まれ往生を願ひ念仏できるのは、ひとえに父母にお育ていただいたお陰なのですから、阿弥陀さま、どうぞ、私がお念仏を称えた功德に慈悲を発して、私の父母を極樂へとお迎え下さって、父母の罪をも滅して下さい」と願うのです。そうすれば阿弥陀さまは必ず御両親を極樂へ迎え摂とつて下さるのです。

恵心僧都一千年御遠念を鑽仰して―両祖師の父母への思い―

今年、平成二八（二〇一六）年は、日本浄土教の祖と讃えられる恵心僧都源信えしんそうざげんの一千御遠忌にあたります。天台宗では祖師先德鑽仰大法会として、平成二四年から平成三四年までの一〇年間にわたって、平成二五年には慈覚大師円仁の一千百五十年御遠忌を、平成二八年には宗祖伝教大師最澄の御生誕一千二百五十年と恵心僧都の一千御遠忌を、平成二九年には建立大師相応の一千百年御遠忌を、それぞれ厳修します。この中、『往生要集』を撰述し、厭離穢土えんりえど・欣求淨土こんぐじょうどの教えをわが国に広められた恵心僧都は、寛仁元（一〇一七）年六月一〇日、仏の手からつながれた糸を自らの手に執り、念仏を称えつつ、七六歳で浄土往生を遂げられました。天台宗主催の法要を前後して、時宗、天台真盛宗、西山浄土宗・禅林寺派・深草派の浄土宗西山三派、浄土宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、融通念仏宗という九宗派主催の法要が、順次、延暦寺で厳修されます。これほど多くの宗派が、心一つにして、お一人の祖師を仰ぐ法要を勤めるということからも、恵心僧都の影響力の大きさが知られます。

七歳にして父・卜部正親公と死別した千菊丸、後の恵心僧都は、九歳で比叡山に登嶺し、天台教学の習得に努めました。その才覚を認められた若き恵心僧都は、十五歳の若さで法華八講の講師の一人に選ばれます。その際、下賜され

た数々の褒美の品を故郷の母・清原氏に送ったところ、母は有頂天になっていた、わが子・恵心僧都を諫める次の和歌を添えてその品物を送り返しました。

後の世を渡す橋とぞ思いしに 世渡る僧となるぞ悲しき

母の切なる訴えに心打たれた恵心僧都は、名聞利養の道を捨てて、横川に隠遁し、ひたすら求道の道を進むこととなったのです。そして、寛和元（九八五）年、四十四歳の時、『往生要集』三巻を撰述します。その冒頭には「それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり（そもそも極楽に往生するための教えと修行は、濁りきった末代に生きる人々の眼となり足となるものです）」と、私達一人一人に厭離穢土・欣求浄土の思いを発すべきことを訴えかけています。

一方、九歳にして父・時国公を失った勢至丸、後の法然上人は、母方の叔父である観覚得業が待つ菩提寺に入山しました。観覚は勢至丸の非凡な才覚を見抜き、わが国仏教の最高学府である比叡山登嶺を勧めました。十三歳（十五歳とも）の勢至丸を遠い比叡山に送ることは、母・秦氏にとって耐えがたい悲しみでしたが、それこそ正に夫の遺志に添うことでもありました。勢至丸の比叡山行きを承知した秦氏は、わが子への切なる思いを次の歌に託されています。

かたみとてはかなき親のとどめてし この別れさえまたいかにせん

比叡山に登った勢至丸は、まず西塔北谷の持宝房源光について修学し、戒壇院で戒を授かると東塔西谷の功德院くどくいんこうえん あじやり皇田阿闍梨のもとで天台教学の習得に努めました。しかし、名聞利養のための修学が幅を利かせる比叡山の中心部を嫌い、「円宗の棟梁となり給え（天台座主とおなりなさい）」と強く勧める皇田のもとを辞し、十八歳で西塔黒谷に移り慈眼房叡空に師事し、そこで法然房源空と名づけられたのです。この時の法然上人の思いは、母の思いに込めたいという一心に他ならなかったことでしょう。

西塔黒谷は、隠遁者が集う、浄土教の盛んな地でした。そこで学んだ法然上人は「私は『往生要集』を導き手として浄土の教えに入ったのです」（『修学についての御物語』）と、『往生要集』を契機として浄土教に帰入したことを吐露されています。さらに法然上人は「私、源空は、中国の善導大師のみ教えに従い、またわが国の先徳、恵心僧都のお勧めのままにお念仏を称え、これまで長いあいだ毎日六万遍と定めておりました」（『聖光上人伝説の詞』）と、恵心僧都が修められた日課六万遍のお念仏を自身にも課していたことを伝えています。

冒頭の法然上人のご法語は、大先達・恵心僧都の父母への思いとご自身の父母への思いとを重ね合わせて語られたものかも知れません。合掌

（林田康順）

江戸の川を歩く

第五回

江戸ウォーカー
森清鑑

霊岸島

江戸市中に張り巡らされた運河、河川の景色を江戸時代人になって、船旅しながら、リアルに再現する。その第一歩が、隅田川（大川）が江戸湾に流れ込む処。海を渡って方々から運ばれてきた物資を江戸市中に送り込む重要拠点、江戸の玄関口。霊岸島近辺の運河描写から始めよう。

海に突き出た霊岸島は、無論、埋め立て地である。一五九〇年、家康が江戸にやってきたときには、潮に洗われ、葦が顔を出しているような沼地のような浅瀬

状態であった。潮が満ちれば、海中に没する。ここを埋め立て江戸の玄関口とする、土地開発が始まる。その第一歩は、この地に一六二四年、浄土宗雄誉霊厳上人が霊厳寺を創建したことにある。彼はこの地の埋め立て、土地整備事業に邁進する。続いて、一六三五年、同寺の南方に越前福井藩主松平忠昌が二万七千坪の浜屋敷を拝領する。霊岸島の体裁が調う。霊厳寺は、浄土宗十八檀林の一つ。しかし、一六五七年の明暦の大火で全焼してしまう。そこで現在の深川に移転することになるが、霊岸島という地名となつて残る。

霊岸島は、大きな運河に囲まれている。日本橋川が



江戸城の北側から流れ下って、二手に分かれ、島を囲んで、隅田川に注いでいる。西南の越前堀（亀島川）、北の霊岸島新堀（日本橋川）。松平越前の蔵屋敷の周囲は、石垣を巡らし、海鼠堀に囲まれていたので、人々はいつしか、越前堀と呼ぶようになる。ほぼ中央、島を割るように新川が東西に流れている。この川の北側に霊岸寺が在ったので日本橋川本流の河口を霊岸島新堀と呼ぶ。それぞれの隅田川接点に向井将監組屋敷や船手番所があり、荷の検閲、海からの侵入から江戸を守っている。

江戸湾から入る

大きな檣垣廻船や樽廻船が帆をなびかせて、広い海の中央に浮かぶ、佃島、石川島の脇を通過すると、左に鉄砲州の湊河岸が見え、角地が湊稲荷の杜。海に面して人工の鉄砲州富士（富士山信仰）が見える。その真向かに船見番所。灯台、常夜灯が立ち、番所に続いて向井将監組屋敷と将監河岸が続く。高橋を潜ると、越前堀で、鉄砲州富士の稲荷橋を左に潜って行けば、八丁堀である。すなわち、大型船は、霊岸島南端に待

機、停泊し、ここで荷を川船の茶舟（荷物船）に移し、越前堀、八丁堀、霊岸島新堀を通り、市中に搬送する。

向井将監

向井将監とは、向井忠勝のこと。父の向井正綱は、家康の忠臣で、徳川水軍の将を経て御船手奉行になる。大阪の陣でも大活躍。その子、忠勝は、二代秀忠の信頼も厚く、卓越した造船技術を発揮。父親に続いて、江戸の海防に務め、六千石の本身旗本になり、将監と名乗る。以来、十一代にわたり、幕府滅亡まで代々「向井将監」を世襲。

越前堀（亀島川）

荷を積んで高橋を潜ると、右、将監河岸、左日比谷河岸が続く。ほどなく前方に亀島橋が見えてくる。ここを潜って霊岸島西側を回り込むと左は亀島河岸、右の霊岸島側は富島町の町並み。やがて霊岸橋について、日本橋川本流に入る。越前堀左側一帯は、時代劇で有名な、八丁堀同心と与力の組屋敷が密集。また、この辺一帯は、医師、儒者、学者、兵法家、歌人、絵師、

能楽師など特殊な職業の家宅が多い。

新川

霊岸橋に出る前、右手側に新川が流れている。これを曲がると、一の橋、二の橋、三の橋と三本の橋があり、大川に出る。

新川を掘削したのは、河村瑞賢。江戸時代初期の政商である。彼は、十三歳の時、江戸に出て、やがて土木工事、材木屋を経営。明暦の大火後の事業で財を成し、新川を掘削する。晩年、霊巖寺の跡地に居を構え、酒の間屋街を造る。彼は単なる儲け主義の事業家ではなく、江戸幕府のために数々の航路を開拓し、治山、治水工事、灌漑、鉾山採掘、築港、開港事業などに貢献する。その業績をもって、新井白石は「天下に並ぶ者がない富商」と賞賛。幕府は、多大の功績を認め、一介の商人から旗本に取り立てる。

霊巖寺移転後に建てられた、瑞賢の屋敷は、新川一の橋から日本橋川まで在ったといわれ、その右側一帯が酒の間屋街であった。大型の樽廻船で運ばれてきた酒樽は、小舟に積み替えられ、大川沿いの新川三の橋

を潜り、間屋の倉庫に入る。

いわゆる関西からの下り酒。

最上級である。酒樽はここ

から江戸市中に搬送される。

酒は江戸の民にとっては飲

料水のようなもの。剣菱、

月桂冠など関西からの下り

物と讃えられ、ここから俗

に「下らない」（価値がない）という表現が生まれる。

江戸で消費される下り酒の総量は元禄期六十四万樽、

酒問屋商人百二十六人（軒）。関西からの下り酒は富士

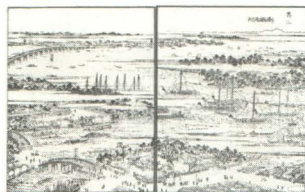
士を見ながら揺られ、香りがつく。ために「富士見酒」とも呼ばれた。秋酒荷一番船が到着すると、印半纏を

着た若者が、町を練り歩き、その様子は、まるで祭りの

よう。かくて新川は、江戸の名所となる。戦災を受けて

から間もない昭和二十三年、新川は埋め立てられ、

今は地名としてのみ残っている。



◆江戸名所図会 長谷川雪旦：湊稻荷社：右、大型船が停泊。中央下湊稻荷と富士。左下稲荷橋、中央突端に灯台、船見番所。左へ将監組屋敷、将監河岸、高橋へと続く。絵の左上に永代橋が見える。

暑中お見舞い申し上げます

平成二十八年

浄土門主
総本山 知恩院
門跡第八十八世

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山 百萬遍知恩寺
法主

福原隆善

〒606・825 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院
法主

真野龍海

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

柴田哲彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七 (一一一) 〇六〇三三

浄土宗務総長

豊岡鏐尔

法然上人御誕生地
浄土宗特別寺院

美作 誕生寺

〒709・3002 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
TEL 〇八六 (七二八) 二二〇二
FAX 〇八六 (七二八) 二二六二

(学)大乗淑徳学園
理事長

長谷川匡俊

〒174・8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
淑徳S.C.中等部高等部

理事長
校長 麻生諦善

白本尊阿弥陀如来・
家康公念持佛

静岡 宝台院

住職 野上智徳

暑中お見舞い申し上げます

平成二十八年

赤坂六地藏尊

浄土寺

住職 阿川正貫

〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五

鶏頭山安樂寺

飯田實雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五（八三）一三六〇

清水湊

忠高山
實相寺

〒112-0002 東京都文京区

小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三（三八）四・三七〇一（代表）

家康公祖母の旧地

玉桂山
華陽院

住職 堀田卓文

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八（五四）〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六（六七七）〇四四四

九品阿彌陀如来

淨真寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

定義如来

西方寺

前住職 大江田博尊
住職 大江田紘義

岩淵

天王山
正光寺

東京都北区岩淵町三十二・十一

無縁寺

回向院

〒130-0026 東京都墨田区南国二・八・十
電話〇三（三六三）七七七六

古今伝授の寺

天主君山
願成寺

メールマガジン info@ganjoji.com

暑中お見舞い申し上げます

平成二十八年

塩竈市 雲上寺

東海林良雲

五劫山 愚鈍院

〒984-0051 仙台市若林区新寺三、十二、十七
電話〇二六（三三三）一八一二

寿福山 寛慶寺

水科善隆

〒380-0852 長野県長野市東之門町四〇六番地
電話〇二六（三三三）一八一二

大吉寺住職

成田昌憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四、七、九

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38

電話 03 (3404) 8447
ホームページ

<http://www.baisouin.or.jp>



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」
住職 飯島英徳

北海道室蘭市
満岡寺・善行寺
(0143)22-4677・44-2695

願行寺

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二、一、一二

森巖寺

加藤昌康

〒155-0032 世田谷区代沢三、二七、一

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四、一二、一八
電話〇四六七（二二三）〇七〇三
FAX〇四六七（二二三）五〇五一

十八檀林霊場会
吞龍上人縁日（毎月八日）

蓮馨寺

住職 桑原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七、一
電話〇四九（二二二）〇〇四三
FAX〇四九（二二六）〇六七六

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四、一二、八

光取寺

大室了皓

〒141-0021 東京都品川区上大崎一、五、一〇
電話〇三（三四四一）八三八四

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●調

〔特選〕
老いゆえか悪しき体調走り梅雨

池田 伊吹

梅雨に入ると、どうも体の調子がよくないと思うようになる。それを老人になったからと思う。誰でも思うことだが、人に言わないで、自分で溜めこんでしまう。人に言わないから俳句になる。

〔佳作〕破調の句ばかりが出来て心太

工藤 掉

扇風機税務調査の長きこと

浮田 義隆

夏の雨季語を調べに図書館へ

強力ふき子

●布

〔特選〕
端居して布袋のようなお父さん

新藤 美紀

縁側かどこかにあぐらをかいて、団扇を使っているのだろう。風呂上がりなどの裸の姿は、まさに布袋だと思う。文語で堅い言い

方にせず、口語にしたのが、内容とよく合っ
ていて面白くなった。

〈佳作〉

若布ひと束供えて神事はじまりぬ

斉田 仁

母の日の小さき布巾を畳みけり

松島総一郎

切れ端の波にゆれいる若布かな

近藤アツ子

●自由題

〈特選〉

睡蓮の水なまぐさくなりにけり

間村 祐三

公園の池などだろうか。水が淀んで動かな
いから、匂いがしてくる。まさに「なまぐさ
く」である。その水に睡蓮のような美しい花
が咲いているのだ。

〈佳作〉

旅先へ友の訃報や竹落葉

柴田 千代

こつなごの釘煮の朝餉志野小鉢

浜口 佳春

紙風船ひとつきふたつきみつまで

増田 信子



旅雨自由題

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会（編集部選）

■調

六段の尊き調べ母慕う
緑陰に幼きピアノの調べあり
アロハシャツ着てスタンドの調教師
調律のラの音の美し南風
調音の弦のざわめき夏は来ぬ
哀調の風のなかなる藤の花
社殿より雅楽の調べ白絢
短調に転じて戦ぐ柿若葉
調教は走らぬ牝馬著我の花
大南風むかしリットン調査団

飯島英徳
早乙女喜栄子
山口宗一
月島恭子
五木公子
鳥羽 梓
土岐田逸子
結城七海
遠山小夜子
内藤隼人

■布

布張りののらくろ軍曹今も生き
父の日にフルート包む布を解く
メーデーの布陣にありて鍋と釜
布干してまだ夏風になる途中
どっかりと布袋おわせり青葉闇
薫風という名の布に包まれぬ
ざっくりと布を畳みて立夏かな
布切れで縛りし蛇口から清水
布地屋の並ぶニセアカシアの街

■自由題

ふるさとしてはずなつの大河かな
ひそひそと女三人柏餅
風薫る修復なりし火焰土器
一望の大河を吾の初夏とせり
白南風の丘に小さな椅子を置く
埴輪の眼窩どろどろ夏の闇
どすこいは母の口ぐせ著我の花
暗がりに匂う卵の花比翼塚
紫陽花の今日いきいきと濡れており

飯島英徳
早乙女喜栄子
市川淳一
村田 篠
内藤隼人
長谷川裕
月野真知
内村 毅
戸田美咲

小林苑を
井澤貞華
斉田 仁
水沢誠治
小林苑を
和田康作
田名網優
舟渡由香里
早乙女喜栄子

締切・二〇一六年七月三十日

発表・『浄土』二〇一六年九月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

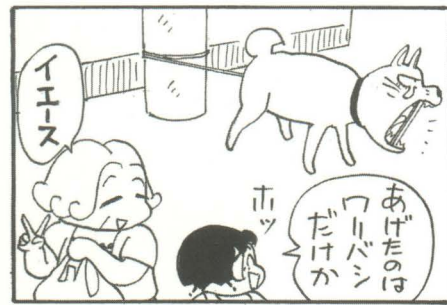
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんねネッ

かまちのよろう



編集後記

花立てを伏せて帰るか盆参り 岱潤

家内がお檀家さんから薦められたという本を購入してきた。『センス・オブ・ワンダー』を探して」という生物学者の福岡伸一さんと阿川佐和子さんの対談集である。本の帯に「生きていく」とはどういうことかと書かれていたので、気になり先に読んでしまった。

「センス・オブ・ワンダー」とは、神秘さや不思議さに目をみはる感性のことで、誰でもが子どもの時、その人にとつての生涯消えることのないセンス・オブ・ワンダーを持っているという。阿川さんは小さいとき出会った翻訳家の石井桃子さ

んの言葉が忘れられないという。「子ども時代をしつかり楽しんで下さい。大人になってから、老人になってから、あなたを支えてくれるのは、子ども時代の「あなた」です。」この言葉があつて今の自分があるという。福岡さんは、小学生の自分を大人扱いしてちゃんと質問に答えてくれた先生を忘れられないという。そしてドリトル先生のシリーズのスタビーズ君にあこがれた気持ち、これが今を創っているという。

自分にとつてのセンス・オブ・ワンダーは何だろうと考えてみた。お参りの人が何故みんなお墓に水をかけるのだろうか、施餓鬼の法話で、阿難さんは

何故餓鬼道に堕ちなければならなかったのだろうかという、どの本にも書かれていない質問に、答えを導いてくれた先生に出会ったときかなと、暑い季節を迎え思い出した。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十一巻七・八月号 頒価六千四百円
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
年費六千四百円

印刷 平成二十八年六月二十日
発行 平成二十八年七月一日

発行人 佐藤良純
編集人 大室了皓
印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇二一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七
FAX 〇三三五七八七〇三六
振替 〇一八〇・八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※ 寺院名 () を入れる・入れない

※ 関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※ 写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※ 消費税と発送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※ 1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、ご注文をご記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
ご郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものがある。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品！！

※ ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※ お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。